



特集にあたって（〈特集Ⅱ〉同時代史としての震災展示：兵庫県立歴史博物館特別展を通して）

吉川，圭太

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:82-87

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505412>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505412>



特集Ⅱ

同時代史としての震災展示

——兵庫県立歴史博物館特別展を通して——

特集にあたって

吉川 圭太

阪神・淡路大震災から二〇二五年で三〇年を迎えた。二〇二四年に入った頃から「三〇年限界説」といった新たな言説が喧伝され、メディアを中心に「記憶と教訓の継承」が頻繁に取り上げられるとともに、各地で震災経験の語り継ぎに関する様々なイベントが開催されている。節目の年に見られるこうした状況は従来と大きく変わりはないが、震災「三〇年」においては、体験者の減少や高齢化への懸念を背景に、「語り継ぐ」ことの意義がより強調された。一方で、継承されるべき中身については、合目的な「防災」や「教訓」に集約される定型化が、よ

り一層進んだようにも思われる。^①

このような震災経験を一般化する流れに対し、歴史的視座から震災を多角的に捉えることの重要性は、早くから多くの論者が指摘してきた。そして、この視点が、震災資料の公開・活用をめぐる現場での様々な取り組みの蓄積を踏まえるかたちで、明確な課題として立ち現れたのは、震災一五年にあたる二〇一〇年前後以降のことであろう。^②

ここではその詳細には立ち入らないが、震災を直接体験していない人びとの増加に加え、体験した人びとの間でも震災を歴

史として対象化する動きが現れてきたことが、こうした状況と深く関係している。三輪泰史氏は伊丹市での聞き取り記録を踏まえ、震災から一五年余りを経るなかで「それぞれの人の震災との距離のとり方に変化が生じ、体験者たちのなかからも、震災を歴史として想起する動きがひろがってきた」ことを看取し、「思いをも組みこむかたちで震災を書くことが可能な時期、書かれるべき時期になりつつある」と指摘した³⁾。この背景には、二〇一一年の東日本大震災を受け、自己の経験を歴史的に捉え直す動きがあったことも一因として考えられるだろう。いずれにせよ、阪神・淡路大震災が「歴史化」しつつある状況において、その把握と叙述が、歴史文化に関わる人びとの課題として実践や方法論も含めて問われるようになったのである。

とはいえ、この「歴史化」の動きは、震災という出来事を過去に追いやることを意味しない。現実的にも、神戸市による新長田の再開発事業が約三〇年を要したことや、個人の体験や記憶の表出には長い時間がかかることがあるように、震災の影響はなお現在進行形で社会的課題や個々人の経験に作用し続けているのである。

これらの事実は、阪神・淡路大震災がなお現在性を帯びながら、「歴史」の領域に入りつつあることを示している。その過程において、私たちは震災の歴史的意味をいかに捉え直し、当事者と生きる同時代の多層性・複雑性をどのように再構成し提

示しうるのかという課題に直面していると言える。

こうした問いへの一つの試みが、本特集のきっかけとなった兵庫県立歴史博物館の特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる—情報と通信の一九九〇年代—」（会期：二〇二五年一月一日～三月一六日）である。

本特別展は、神戸大学文学部の学部生・院生一〇名（日本史学・社会学）が、授業の一環として展示作成の一部に協力した。この博物館と大学との連携が本特別展の特徴の一つであるが、こ

の点について授業担当者の立場から若干言及しておきたい。

神戸大学文学部で私が担当する日本史演習では、二〇一九年度以降、コロナ禍を除きほぼ毎年、震災資料を扱う資料演習を実施している。文書資料や視覚資料など演習で扱う媒体やテーマは年によって異なるが、いずれにしても歴史学の方法に



写真 ゼミの様子（2024年6月10日、神戸大学文学部）

よる資料読解を基本とし、ときに当事者からの聞き取りの機会を設けている。今回、兵庫県立歴史博物館の吉原大志氏からの依頼を受け、二〇二四年度前期の演習を本特別展に向けた資料調査と資料読解、展示内容検討、解説文作成にあてた。本特別展は、こうした教育・研究の積み重ねを反映したものである。この展示実践は、公的な歴史博物館が現代の震災をどのように提示するか、またその過程に関わった震災「非体験」世代がこの同時代とともに生きる他者の歴史経験にいかに向き合い、何をつかみ、どのように伝えるかが試されるものだった。

* * *

このような課題と経緯を踏まえ、本特集は「同時代史としての震災展示——兵庫県立歴史博物館特別展を通して——」をテーマとし、この展示実践をどう見るかについて、①展示の企画担当者、②展示作成に関わった震災「非体験」世代である学生、③震災の当事者を含む展示観覧者という異なる立場から、五名に自評・展示評を寄稿していただいた。

まず、吉原大志氏（兵庫県立歴史博物館学芸員）の論考は、展示企画者の立場から企画の経緯や意図、展示概要を詳述する。震災資料の活用や展示が「防災・減災」のためという有用性に偏りがちな傾向に対し、震災を「現代史」に位置づけることで、その定型化を避け、多様な歴史的経験を提示することを試みる。その切り口として「情報・通信」を設定し、一九九〇年代社会

の多層的な実相に迫るという意図を明示している。さらに、大文学との連携による展示作成を通して、震災資料の活用における教育・研究・実践の接点とその意義を示す。

次に、原岡千紘氏（当時文学部日本史学四回生）の論考は、ゼミでの展示作成経験に基づき、資料の調査・選定から叙述に至る過程を丹念に描き出し、資料や証言との対峙を通じて、自らの認識や資料の解釈が問い直されていった思考過程を具体的に示す。この省察を含む過程が、震災「非体験者」として当事者の経験に向き合う「緊張感」や、同時代資料を読み解く難しさを伴うものであったことが率直に語られている。

これら二本の論考が示すのは、博学連携の場が、学生らの認識のみでなく企画者のそれをも変化させる相互作用を生み、互いの認識をすり合わせ、深めていく過程であったことである。

本特集ではさらに、展示を観覧した立場から真田尚幸氏、霞末和範氏、松岡弘之氏の三氏に展示評を寄稿いただいた。

真田氏による展示評は、震災を体験した立場から、本特別展が個々人の体験に応じて様々な記憶を喚起するものであり、新たな「語り」を引き出し得る契機になったと述べる。次に霞末氏の展示評は、震災当時「灘ボランティア」に参画した経験を踏まえ、展示が過去の活動記録を再発見させ、失われかけていた記憶を現在に引き戻し、未来につなぐ役割を担ったことを示す。さらに松岡氏は、自身の被災地でのボランティア経験

を踏まえ、展示が情報発信主体を多層的に構成し、「伝える」営みの多様な様相を提示した点に意義を見出している。特に、一九九〇年代の「多声的」な市民社会が表象されるなかで、自身の経験が位置づけ直される契機となったことに言及している。

展示の受けとめ方は、それぞれの経験や立場によって異なることは言うまでもない。むしろ、震災展示が往々にして陥りがちな有用性の強調や定型化に対し、この展示が特定の見方を拘束するものではなかった点こそが重要である。そのうえで三氏に共通するのは、展示に接することで自身の経験が対象化され、現在との関係のなかで捉え直されている点である。その過程で震災資料の意義が見直されるとともに、経験を伝える契機もたらされている。ここに、同時代史としての震災展示の意義が潜んでいるだろう。

しかし、これらの展示評は、本特別展の抱える課題をも浮き彫りにしている。指摘された論点は多岐にわたるが、ここでは展示の叙述方法に関わる三点に絞って整理する。

まず、本特別展は「情報・通信」というテーマを設定することで、被災地の多様な営みに一つの軸を通した。しかし、松岡氏や真田氏が指摘するように、この展示が「伝える」側（報道機関、市民団体、個人）に焦点を置いた結果、それらが「受け手」に「伝わる」という受容の側面や、それぞれの言論空間がどのように交錯し、全体像を形づくったかという点に関しては、

歴史叙述の方法論的な課題が残されたと言えるだろう。

この「受け手」の視点の欠落は、外在的な批判ではなく、本特別展の構造に関わる問題である。本特別展は、「伝える・知らせる」を主題とし、人びとがその声や情報を共有しようとする多様なあり方を、共時的な関係と現在に連なる通時的な関係という二重の構造のなかで捉えようとした。しかし、被災者の情報認知にずれが存在したこと、さらに自己の体験を公に表出するには時間ときっかけが必要であるという真田氏の指摘は、「伝える・知らせる」という主題がもつ時間軸の複雑さを示唆する。情報発信主体の「奮闘」によって可視化された側面に加え、被災者の情報受容や記憶の表出の過程に内在する「空白」や「沈黙」をいかに捉え、このことを含めて表現する方法について、引き続き検討が必要であろう⁴⁾。

二点目は、右の点と密接に関連するが、叙述から落とされた部分をどう考えるかという課題である。具体的には霞末氏の指摘に見られる、ボランティア内部の運営体制に関する叙述の不足である。この点は、「灘ボランティア」資料を扱った原岡氏の論考が、ゼミでの議論を通じてボランティアの「熱意」や「勢い」の文脈に焦点を結び、その過程で当初関心のあった行政への活動「引き継ぎ」といった実務面を外さざるを得なくなったことを明かしている。この焦点化は、組織内部における運営体制の困難さや活動の多面性といった実態が、「奮闘」という面

の陰に隠れてしまうという、歴史叙述上の構造的な課題を示唆している。このことは、非当事者による資料解釈の困難さ、博学連携の協働のあり方、そして資料の多面性を引き出しきれなかった授業担当者である私自身の責任という、複数の要素が絡む課題として突き付けられている。

ただし、原岡氏が自覚的に、震災資料の解釈には当事者の聞き取りが不可欠だと指摘している点は重要である。これは、霞末氏が本展示との出会いから、経験語り継ぐ重要性に言及されたことと響きあう。震災非体験者が、資料とそのオリジナルな記憶の保有者の語りに接することで、体験の有無を超えて震災を捉え直す可能性がここに開かれている。同時代資料である震災資料には、相互に触発される力がある。

三点目は、松岡氏が指摘するように、展示で表象された「多声的」な市民社会が、「国際化」や「多文化共生」の文脈に集約されることへの疑問である。在日外国人が多く暮らす神戸市長田区で支援活動を展開した鷹取救援基地への着目は、本展示の大きな見どころであり、企画者吉原氏の意図もそこに存したと聞いている。であればこそ、多様な経験や歴史の複雑さを提示しようとした本特別展において、鷹取の活動が他の様々な市民活動といかなる関係にあったか、それが一九九〇年代社会、ひいては戦後市民社会においていかなる歴史の意味をもつのか、さらに構造的に問われるべきであつただろう。



写真 学生による展示解説（2025 年 2 月 22 日、兵庫県立歴史博物館）

と観覧者という関係を超え、同じ時代を生きる「市民」としての相互的な関与が求められているのである。⁵⁾

叙述や展示は本質的に「不完全」である。だからこそ、私たちはその不完全さを自覚し、議論を重ね、再構成された震災像（歴史像）をたえず問い続けていくことが要請される。

個々の経験に立脚しつつも、その多様な経験が結びつき、せめぎあう現場に目を凝らし、「全体像」を構成する努力がつねに求められる。震災を経験した人びとの反応や「実感」を真摯

阪神・淡路大震災の社会的経験が、戦後の市民社会に投げかけた問いは何か。この問いは、展示の企画作成者のみならず、観覧者にも投げ返されていると言えよう。安田常雄氏が、展示とは「問い」の提示であると指摘し、「現代展示」の核心を「経験をめぐる触発力の相互性」と捉えるように、そこには企画者

